

私の中の長崎／その④回

文、藤原 暢子

*text by Fujiwara Nobuko

「ご実家はどちらですか」。

会話の話題が途切れた時、この質問が必ず出てくる。東京にいと週に2回はこのやりとりに出くわす。

「島根です」とか「福島です」と言われると、だいたい相手は「はあ、そうですか」となる（偏見ですみません）。東京や神奈川、千葉、埼玉の人は自虐的に「ずっとこっち（関東）なんです。つまらなくてすみません」と謝るか、「田舎があるっていいですよ」と聞き役に徹する姿勢をすでに見せる。

一般的に話が広がるのが、北海道や京都、大阪、長崎、沖縄など、ある程度の人が修学旅行を含めて行ったことがあるとか、歴史や文化、食べ物についてなんとなくでも語れる場所だ。

大学時代もこの手の質問がよく飛び交った。「実家？」という短い質問は、実家から通っている関東の子なのか、どこかに一人住まいしている地方の子なのかという意味だ。バブル時代、「東京家付き娘」という言葉が流行ったように、自宅住まいの女の子のほうに価値があったので、この質問は好きではなかった。都会には馴染めないと、きびすを返すほど繊細ではなかったけれど、ぽつんと一人東京にいるのを認める悔しさがあつた。

そんな私にとっての救いは長崎が“世界に向けた街”だったこと。高校生になるまで九州を出たことがなかったが、東京に来る前に、高校生の交換留学制度でアメリカに行った。「東京がすべてじゃない。長崎には外国人の方もたくさんいる」。そんな思いが不安定で多感な10～20代を支えてくれた。正直に言うと……。

さすがに、大人同士の「ご実家はどこですか」の会話に他意はなく、「長崎です」というと場はかなり盛り上がる。

「ハウステンボスに行きました」「魚がおいしいですよ」など基本的なやりとりから、「カステラを買うならお勧めはどこですか」「皿うどんは細麺派ですか、太麺派ですか」とのマニアックなトピックに展開していったり、「隠れキリシタンですか」という本気が冗談か分からない質問も受ける。

長崎について何かを知っている人が多いけれど、“長崎の人”は東京に少ないので希少価値的な扱いを受けられるのだ。一応、礼儀として、こちらも相手を喜ばせるネタを準備しておく。

「長崎弁も話せるのでバイリンガルなんです」（オジ様向けジョーク）から、「近所のおばさんちのお仏壇には仏様でなく、マリア様が飾られています」まで、一人「県民ショー」に奮闘する。

客船の雑誌で働くようになり、取材で外国の客船に乗っても“長崎”は通じる。国の首都は知らなくても、よく寄港する港は皆覚えるので、外国人クルーの8割が“知ってる”と答える。“東京”に行ったことはないけれど、“長崎”には行ったことがある外国人と世界の海の上で出会うくすぐったさ。

「実家は長崎です」。今週もそう元気に答える。

実家はどちらですか？

